

A 770

金庫きんこ

服部應賀著

記

三さん代だい

記き

初代藏

南

卷之八

骨折山



服部應賀

48-7675

初代之

親が苦をよる

初代蔵

一冊

石部

初代魚伊勢屋の案をよる通り

其子樂をよる

二代蔵

一冊

金吉辛

苦背

二代目の伊勢屋の案へ初を川継

其子孤食をよる

三代蔵

一冊

負寶之

山登

三代のいせや松屋をう里つる

金庫三代記

譬言 服部應賀著

初代蔵

夫金貸か子を産と以謗りまば或親金おむり

ひん汝何を喰て子をうむやと聞けまば金ハ利と

りりめを喰祓ば子のうまはをま由人間の子を

生かす小一間小閉籠るといちがひてまら其親金

と他家へ稼お出りて利を喰をまば子をうむ事

胤鬼ハ思ひゆよらば。さるおがら其産し子の本

家へ戻ることあるもまど由其親金首尾よく本家へ立戻  
ると稀なまど昔より今の猶御裁判多端のうち  
夫等の種類を原告する者らに過半ありしゆ  
誠初の水魚の如く睦の後ハ呉越の争より御  
上御苦勞々けるを見まは出まふ安く取ふか  
くく人の味方翌日の敵已か金四へに一命を失ふ  
者あまばるるく宝との思はまは金ふいなる  
金を持へしゆり金言あるまは茲小東都の  
は是どまとの金言あるまは茲小東都の

小伊勢屋金吉とあり此者ハ元勢州石部の  
宿の貧民ありし時親孝行の報ひあや獨身  
となりしころをまは住所より金の塊を掘  
出せば是を天の賜の思ひ東都小携へまは  
てをまを賣て若子の金を得まを元平とて  
怠らば持しゆり身骨を勞する業。天運小悞  
ひしゆまはことあるまは利を得て終小質屋を  
めまの人の地より人の地主となりて三扉の蔵を建  
昔をこすまぬ為とて金の塊を圖小かして掛物と

朝あさ夕ゆふあまを  
 拜まが一ひと又また出入でいり者ものふゆ  
 見みせて。人ひとの正直しやうじき律りつ  
 羨みやあまが譬たとへへ負おん小  
 及およぶと由よし天あまの冥みやう助すけの  
 あるゆゑと語ことりけれ  
 見けん見けんを見聞けんたる者  
 石部いしべ金吉きんきちの金兜きんたう  
 と高坪かうへいさまとる 大家おほいへ

といふことども金かね舌したの  
 頗まぶる儉約けんやく者ものあて初はつ  
 輕かろのごとくむごめのか  
 大おほさらひ口くちへ臺たい所ところふ  
 く常とこあつうの附木つけぎと  
 束たばあて渡わたおけが無む心こころ  
 の下女したによが焚付たきつけふつる  
 へいとて一枚まいの附木つけぎと  
 十じふ割わりてごころかき

金かね子こをむ



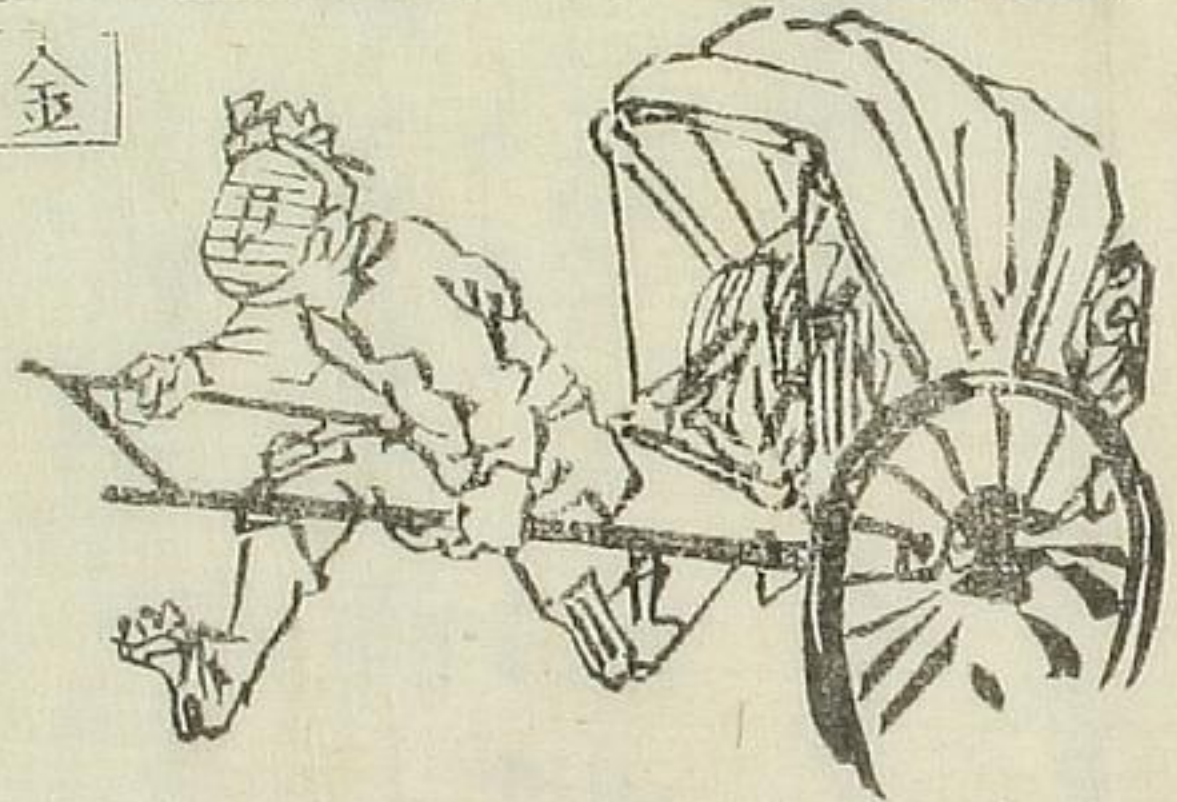
百ひゃく両りやうのうまの  
 子このうまの  
 むらひてゆゑのうまの  
 金かねのうまの  
 かなとてゆゑの  
 ままのうまの  
 うまのうまの

金かねが極ごくている



かのうまの  
 かなとてゆゑの  
 ままのうまの  
 うまのうまの

金かねがといひ



上のうまの  
 いそはうまの  
 うまのうまの  
 人のうまの  
 うまのうまの

金かねが寝ねている

おのうまの  
 かまのうまの  
 のうまの  
 うまのうまの

金かねがわのえをつま



そのうまの  
 こんとてゆゑの  
 うまのうまの

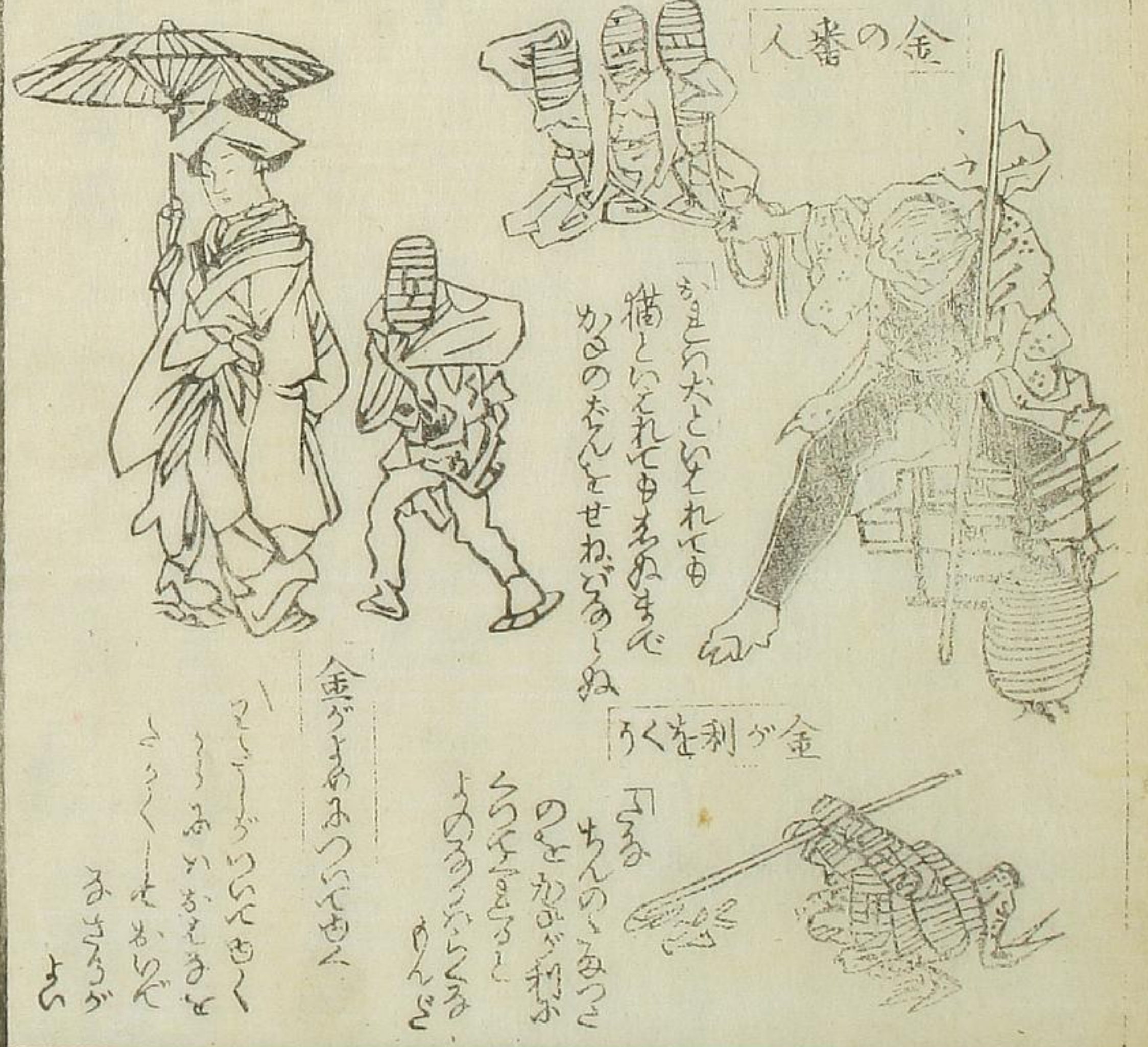
又家内中の枕紙まくらかみふゆ生紙まがきの反古かごの用もちひさせば粘ねり  
紙かみの文ふみを撰あつひて大おほきをあらへ汚よごれ  
が又そのかゝるをさしその汚紙よごかみあて行燈あでんのろいを  
掃除さうじさせその油あぶら染ぬるを又捻ひねらせ紙燭しきと一ひと  
常とこ小燭こしきのかり用もちひさせらあて其余よ  
べし或時あるとき二十三年にじゅうさんねんあはる伴金太郎ばんきんたろう百金ひゃくかんとの万ま年ねん青あお  
を求めんといへば眼玉めだまの飛出とびだれど怒おこりけ子こあ  
あまごの又また慾心よくしんのまゝとろろ縁日えんじつあは金錢花きんせんぎ  
を一ひと辨わきま文ぶん久く三さんッつあてりあまゝりて伴ばんあはる一ひと

見みるよりあといし十九じゅうきゅうある娘むすめのお銀ぎん二百兩にひゃくりやうの鬼おに  
と求もとむまよしといへば雷かみなりのごとき声こゑあて呵あつりかた  
とき爪つめの揃そろぬ小鳥こどりを買かひて娘むすめをよびまへ  
奢あつの身みをよそまりのかまばよく儉けんをよそしそれ  
一ひとりり二ふたりりの志こころまのをやくふたね回まわへ身みの廻まわり一ひと  
さの事を志こころまりせよ此鳥こどりの十じゅうの志こころまのをすれば  
十じゅう志こころまりとよんでその羽はねいろも花美はなびを銚しやうら孫まごの飼か  
かいて是こゝを見習みならへといふけし娘むすめもよぎる二百  
兩りやうの鬼おにのかりふりか二三日ふたみかまがらがるや

つぎと龍をうらみかまのを見て金太郎もこん草花  
いろりあると裏家やの子供こどもふらしてあまふ程ほどあるは  
此二人ふたりの行末ゆくすえやがてあまふべしきて此家の金藏かねざうふい  
昔むかしよりの金銀かねぎんをあまふとあまふ置おきけらるる開明かひあきの  
御代ごよふい無心の者ものも口くちをまくりのうら箱はこのうら  
あて慶長けいちょう小判こばん欠あやをえるがうけけらふいア寝ねりき  
とく百合やうり若殿わかしらの七日あつた七夜しちや寝ねとのとあまふ先  
ふもるい長寝ながねとくどもくうい此藏このくらの内うちへきてく  
二十年にじゅうねんよも寝ねつゞけごころくそこふ寝ねていり大閣たいかく金

チト眼めを覚さして大坂おさか夏冬なふゆの咄うたでもせぬ大閣金「イヤりう  
戦いくさの咄うたいさるゆまの平ひら聞きゆまのびくモシ達たちて聞き  
くばつづくるる銭ぜにでもくふのけ見みてきこやうふたき  
さてる席せきがあつた。をきよりゆコレげん元録げん金きんめをさま  
してそちが時代とごの咄うたをせよ元録「さればこゝが時代とごふい  
まが諸しよ藝ぎ人の名な高たかひ者ものがあつてなれども後ご代だいまで  
名なをよむとさるのい赤穂あかほの義士ぎしが退屈たいくつの目め覚さふら  
りりしやうりる咄うたがよのころく宝永ほうえい金きん かつとがつ  
てんてんが時代とごふい三國さんごく一いつのお富士ふじさんが焼やをこ

一と事があるならん  
 こまより名高ひ吐  
 へあうほうひサアおの  
 あら正徳のむんど  
 正徳  
 ハテさてお氣のぞく  
 ぶつーか時代のら  
 と五年で吐くふす  
 事ゆるひのへ享保  
 金二人まをよほく



一のむい 一是のめい  
 つくが順ふつこれが  
 ゼひがるひさんころが  
 時代の名高いのち  
 交趾國より象の牝  
 牝と貢ぎ一が牝を長  
 寄あて斃一牝をり  
 禁闕へ入しきい今の  
 かりることべいあ獣





の身こで有りなりが之これ由よし廣南えんなん後ご四位い白象はくしょうと稱なづて参内さんない  
をせしゆへお公家くげ様さま方かた由よしおんおんるる珍めづらししののりりののりり  
とてあまあまととお歌うたををお詠よむむささととゆへゆへ一いち音おと  
ままとと正ただししのの奇き持もちるる事ことその歌うたののああんんととよよんん  
さまが。くくいいつつくく獸けものああららぬぬふふららいいつつくく是こゝのの象しょうのの  
利りららつつ氣きががああままぬぬとと讀よむむとと正ただししののああままくくおおりりららひひが  
本歌ほんかあありりててハハ字じがが多たひひるるんん下しものの句くとと。是こゝのの象しょうのの  
アアららんんとといいししややいいとと三さん十じゅう一いち字じのの歌うたああららううふふイイヤヤ  
くく大おほききるるけけそのその歌うたのの文ぶん字じ由よしけけいいふふよよむむのの古こ実じつとと

さてそとそとううろろその象しょうが江戸えどへへままんん二十にじゅう年ねんののううてて終おひりり  
そとを埋うめめととそとそとろろををいい今いまりりつつてて象しょう死し骸がいとといいハハイイヤヤ夫つまのの  
ちちぐぐんん。そとそとのの中野なかののの宝仙寺ほうせんじののままぶぶぶぶ鬼ま子こ母はは神かみ々々  
中野なかのへへええんんののちちぐぐひひののああいいかんかんべべんんししろろ正ただししののままぶぶぶぶのの頃ころのの  
そとそとるるぞぞいい珍めづらししううろろとと此こゝ頃ころででのの象しょう由よし虎こ由よし獅子しし由よし珍めづらしし  
ししくくゆゆるるんんととゆゆるるいいササアアののちちとといい元もと文ぶんととヤヤ元もと文ぶんめめええ  
りりつつののままああるる逐お電とんとと正ただししのの文ぶん政せい金きんのの番ばんととヤヤああぬぬ  
のの身こははるるんんとと臭くさひひ一いち寸すんよりより一いち尺せき手て前まへ  
のの身このの澱い滓じららささいいととけけくく咄はなせせばばくくがが臭くさひひととけけゆゆええるる



多きどもまぶそのぬくそそのあるひがぬけぬと見へる正され  
 ばよ金中人のヨロいありひの一生ぬけぬへるんでも氣を付  
 る事ごサア天保金。是はいつるにヤヨ天保金何のふ泣のど  
 保一私何をかくしませう昨夜皆さん方お生別する夢を見れば  
 是もや永年一箱お同居する由深ひ御縁あるふ今更散々  
 おあるとうとわりの小判の耳も逆上りゴザ目々黄色ひ涙が  
 小粒のやうおろろくとおぼえます其夢の  
 くらひ事二代藏かてころりまするあく  
 初代庫終

紀元二千五百三十四年五月

方高先生新著述表題

智恵 練神 虎水 猿 画生先齊曉  
 島の 市の

和談二才圖笑同  
 新理解文 五穀祭号二画

東京書林仙鶴堂  
 浪花町  
 小林喜右衛門

老幼を育みては法人をち家の  
 たりおろりて匪別する孫鏡  
 歴社を学ぶ老おひさあー  
 各自お用おしめをさしませ  
 さあぐのほお思ふ悪人を物  
 いとて捕縛を家お索  
 世界中の物を代替て家おひん  
 さるるの滑稽 全三部  
 世界大系お困へりころりて名を  
 ころりころりの滑稽

三  
代  
金  
庫  
記



時  
時  
時



服部應賀著



二代蔵



定價三錢五厘

官許明治七年六月廿五日

二代目

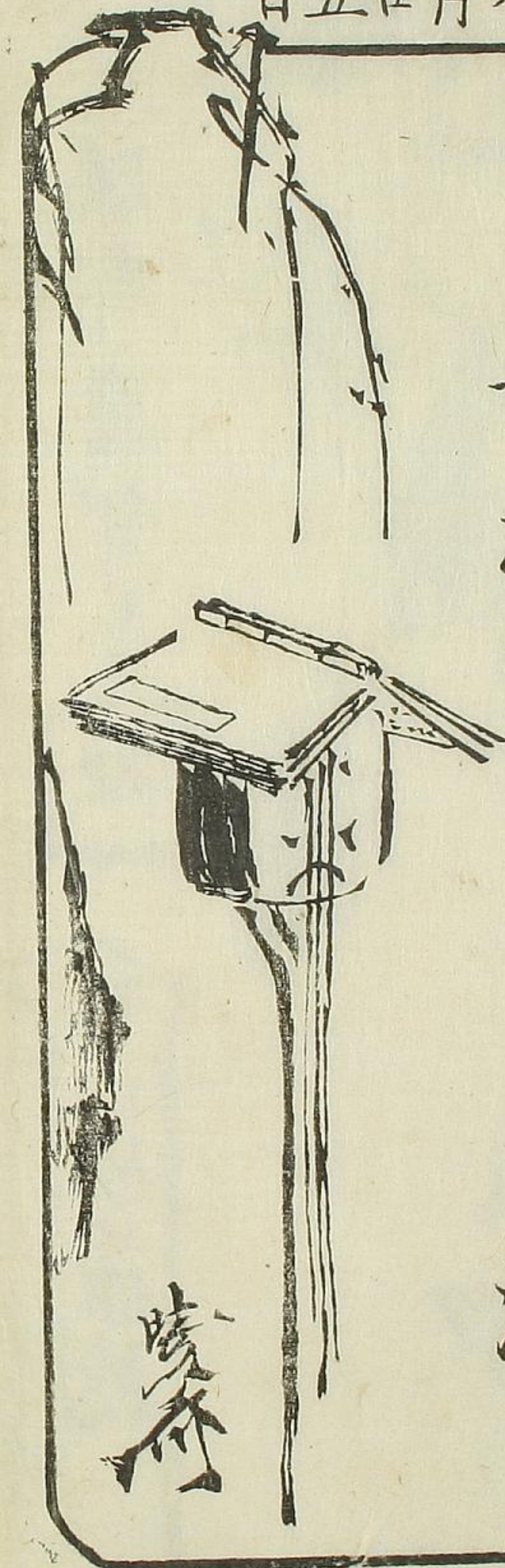
石部金太郎

家雑

放埒

橋

渡



渡

金庫三代記

二代蔵

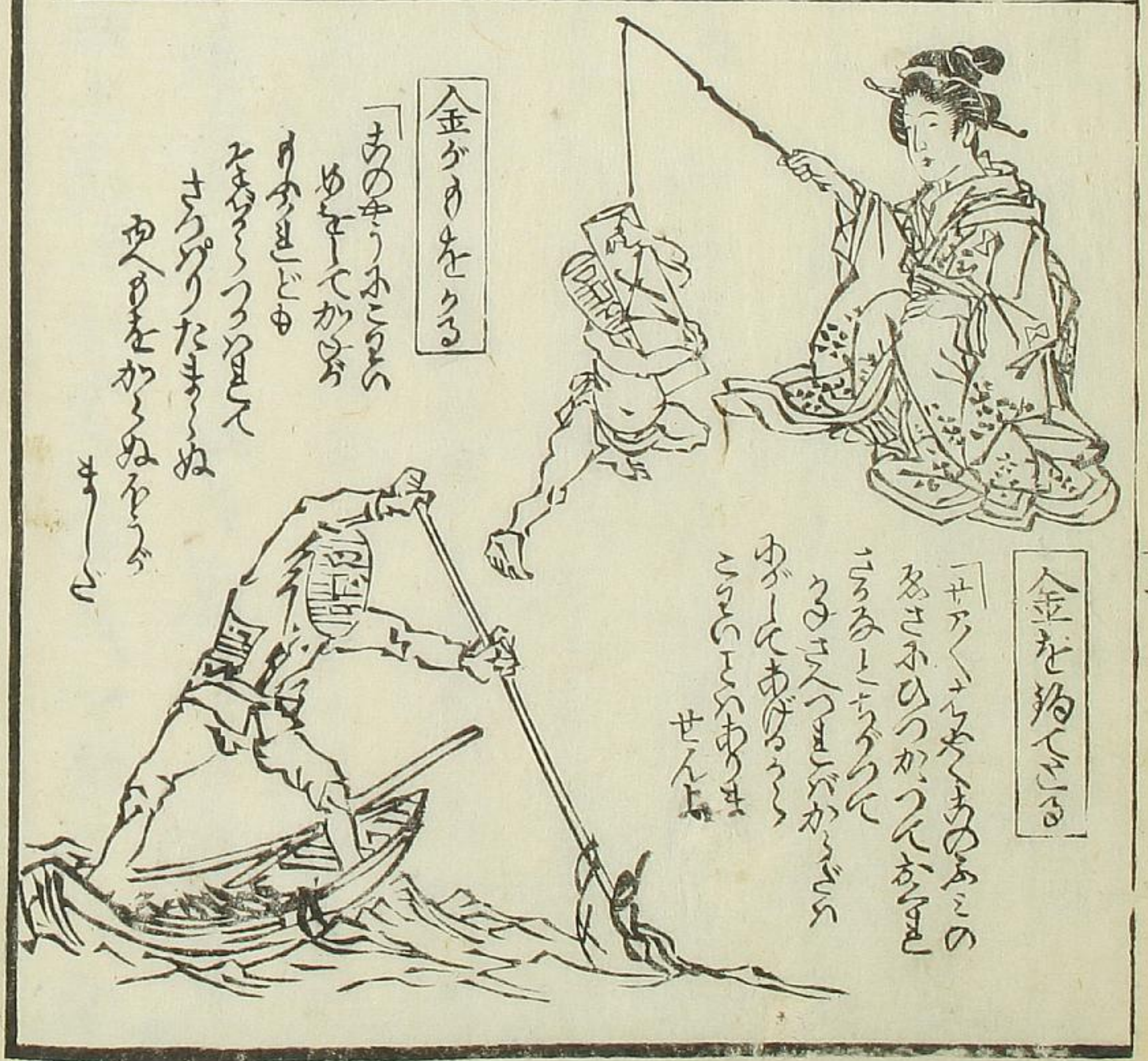
譬言 服部應賀著

夫それ聖人せいじん小夢ちゆめあり馬鹿ばか小苦勞くるうありといひ人ひとども聖人せいじん小夢ちゆめあり馬鹿ばか小苦勞くるうあり世よの中なか由よしへ馬鹿ばか親父おやぢ小驢うま苦勞くるうの大おほい慾よくあり馬鹿ばか女房にようぼう小驢うま衣裳いさう好このの苦勞くるうあり馬鹿ばか息子むすこ小驢うま錢ぜにをつつみ苦勞くるうあり馬鹿ばか娘むすめ小髮かみ姿すがたの驢うま苦勞くるうあり馬鹿ばか学者がくしゃ小生せい國くに住居ぢゆうきよの風土かぜつちもあつて他國たこくの變事へんじ小苦勞くるうもつ驢うま々々史記しきありて見れば

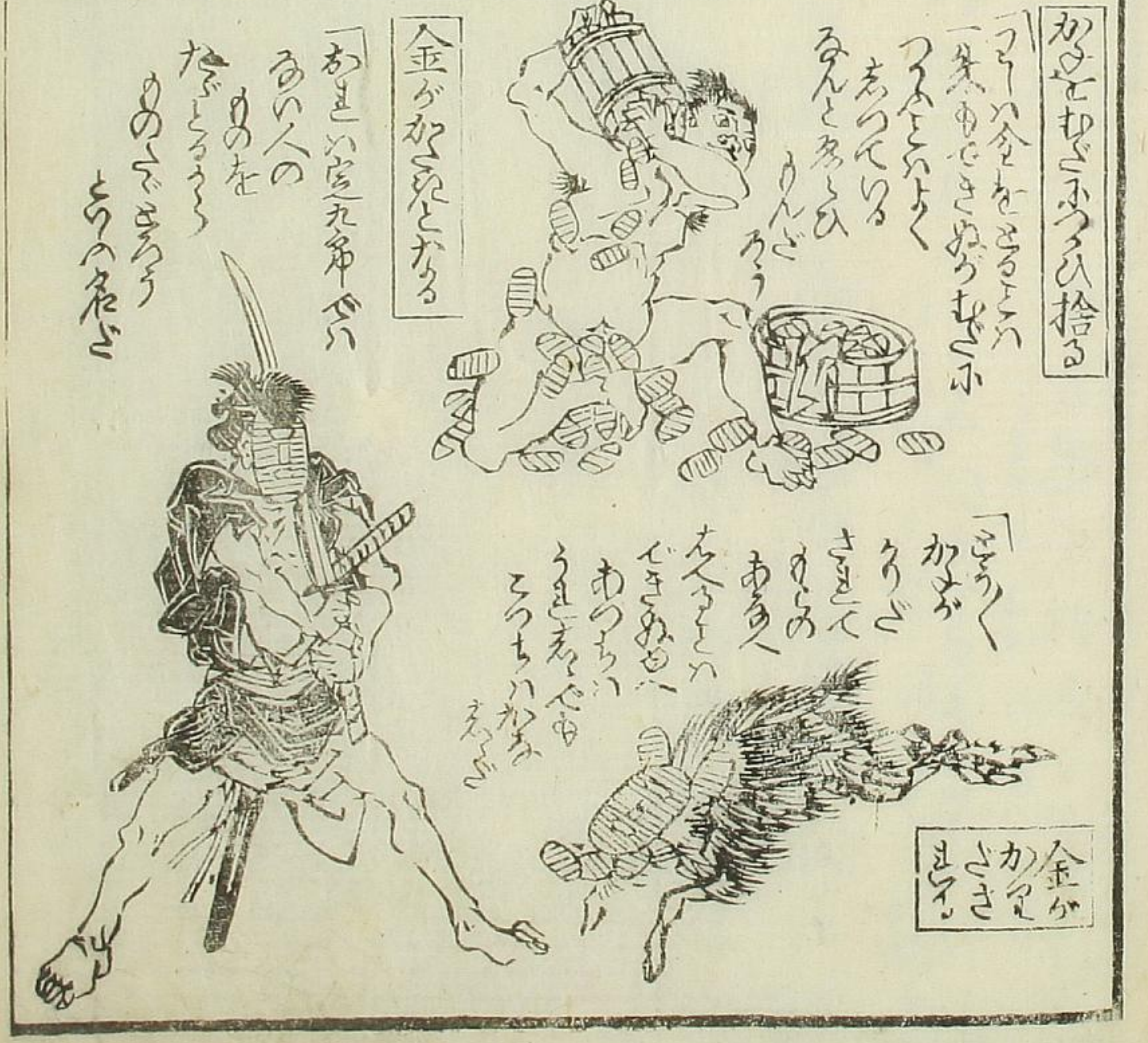
冥無心の金貨とて夢も苦勞も無ことあらんやされが  
石部金吉の金蔵もて天保金の夢物語も同居の古金  
一同笑ひとせぬ一処へ先年出奔せし元文金立歸りし  
也へ一同愁傷の色を直せば文政金が元文ふりしや「君ハ  
永年一箱も同居し居る一言の暇乞もせぬ紛失せ  
し多罪あり又紛失の金が今立歸りくるものを天保  
金の夢もこれくが散るとして泣面をたる忌りさ  
昔の當りの夢と鉄炮も譬しが今の世がひのりうへ  
しふるのて當らぬりの夢と銃るれば急んぎ直しふ

一笑せんと大音も笑ひけとば元文金声をひそめて  
「司りくそんも大きき声でせまへ天保金の夢も天  
保やつあさりふもせよ正夢の志さいがある「そんあ  
早くその志さいをり神武以来ためしむい小判の  
笑ひ損はよけども天保金もめんがくがみひ「まづ  
「うが戻てきと志さいのいとふりて「うが見と世の中  
の景況「う咄を「手まへ世の中へ出てきておのるふと  
せりし景況といふあんの事ど「けいきやうといふありさまの  
事ど昔とちがつて今の文明開化ふるれば百事皆

改まれば通用金の跡  
 役ふ紙へいとりの  
 のぞ出とせとめい  
 人も古習ふ馴て正  
 金の焼ても残る宝  
 りりと六ちうがりま  
 めばあちうもアまきと  
 互ふ勝とり負うりの  
 相場の違て損徳也



多うりーが此頃ハ正  
 金の正の字ゆり  
 ものあくて高砂の  
 謡のやうふさつくの  
 声ばうり又小判の  
 いびつものありーが  
 あと役の形ハ丸く  
 納る印とある又錢  
 鳥の目ふ似と穴が



あれが鳥目ともよびとりしが是ふ又お足とつ小名が  
らとが穴と足とのあぶまいやへ穴のまいか足がで  
きう或ハ一文が十文四文が二十文又十五文も轉任  
をうあれが四文が三文ふたは當百が八十の關官  
されの中ふ一文が一文のもちり彼三文ふ足らぬ鉄  
銭のよく青銭の中間も属して商人の眼を盗む斯  
宝貨の下族等が混乱をうありきまの誠小珍  
らしい事でのあいうアロガくとびとをこし休む  
うち安政小判「是はいうるも迷子札ふまが身で

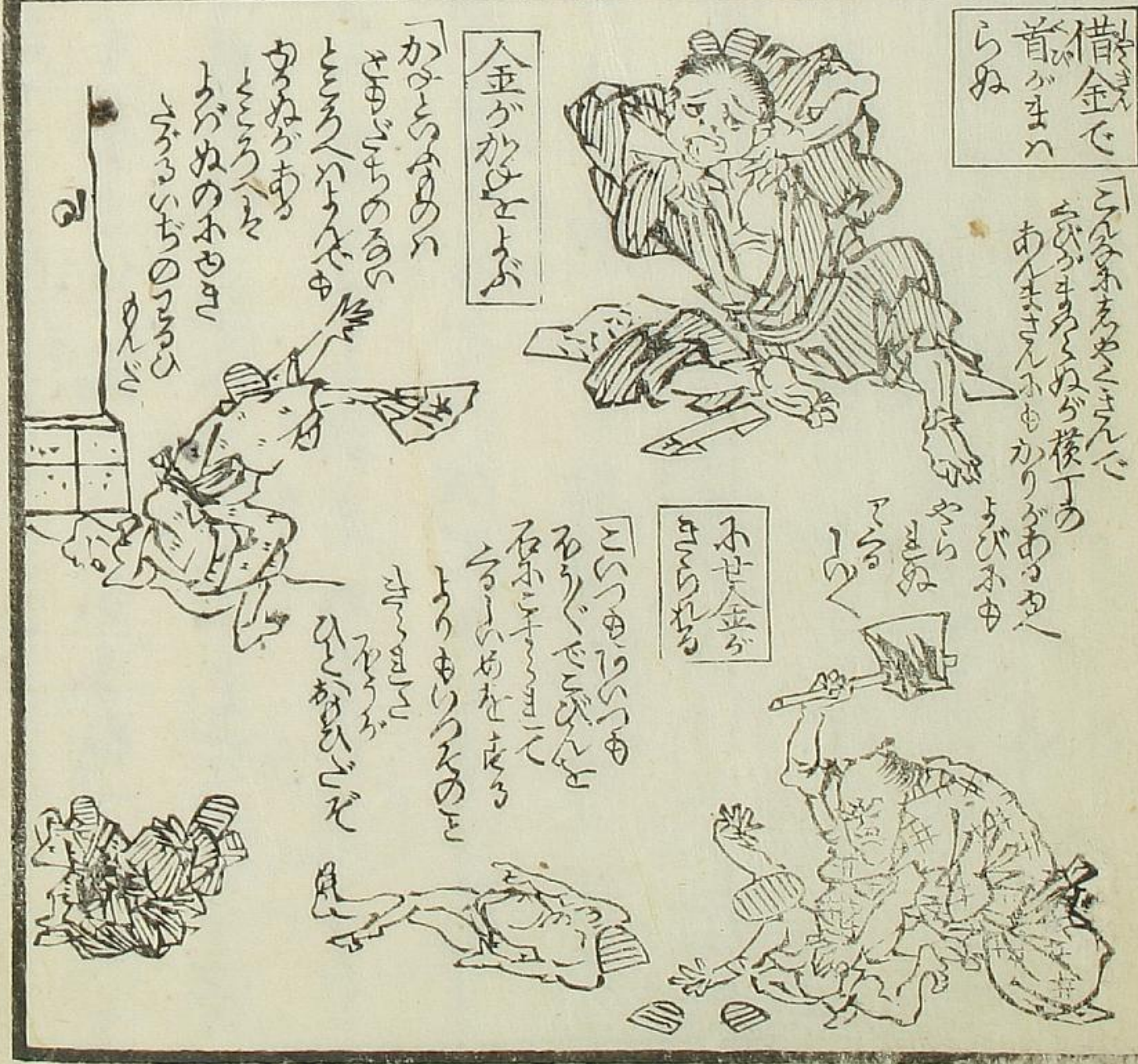
お歴々の中への忍入「イヤくさうでみいたと人四又ハ  
かの慶長殿以下其時代ふよのて量目の不同を  
ども誰が位も皆一両の同輩ふれば少も億とて六  
とのみい「さうがお笑ひ草ふお聞かさとよ此間  
新道の按摩のところが風躰の見ぐるしき二か  
判が質ふきんりふふい。その金銀とつ小りの世の中を  
立めぐるりのあまが通宝ともよぶものを此蔵ふ何  
年とあく寝てつる古金達のことあくおりろい  
処せめぐりあるくさうらの眼と見るとさるが



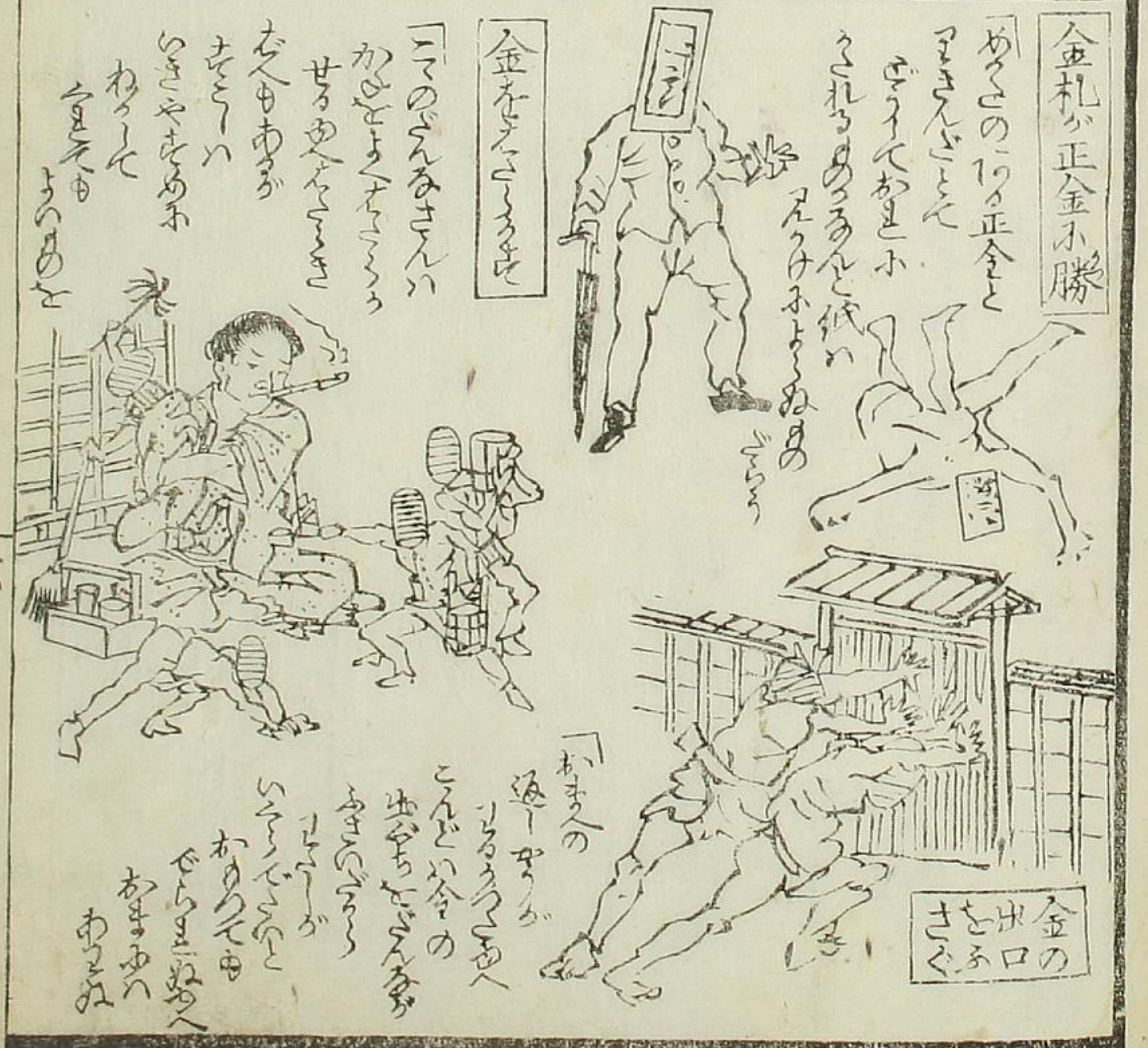
牢らうふとつつのの罪人ざいじんの如くといへば。私わたくしがあらうぬら  
とる寝ねてつる金の起おきて働たたらくのの今いまでもできうが一  
日寝ねといとて二いらせふんで主まが寝ねうすめうとや  
りふめまば又それのさうでもさうらの寝ねばふ  
金かねが働たたらて主まふ忠義ちゅうぎの子こをふやす又薩さつ戸とふの寝ね  
人ひとといふがあつて寝ね賃ちんを取とつふを聞きくが前方ぜんぽうの  
寝ね賃ちんのどこうところと黙もくふあをといふかへ汝なんどよく  
きけ慶けい長ちやう様さまをぞの當たう節せつ一兩いちりやうの御位ごゐが寝ねいて十兩  
の位ゐふ登のぼる其以下そのひたも皆みなそをふからふ。昔むかしくら高利かうり

日ひ搦なふ促い給まく働たたらく金かねといふ論ろんふのあらぬ。こつと  
あちあちの店みせへおけば椽せん板ばんへ投な付けらるゑて是こゝのチン  
復ふふたぬ是こゝの坂さかどの筑ちくどのと異い名めいの舟ふねのまじりけ  
れど宝たからともいふる身みが石いしでふびんでこそまじりけ  
銀ぎんの出でのの稀まれありて銅ちゆう鑰やくの正せい躰たいをあらうり百兩ひやくりやうが  
たぶの三十兩さんじゆりやうふもあつて潰つぶ鉄てつの裏うらふはつるの獄ごく舎しゃ  
と出でた體たいふひとと。やりふめて勝かつと思おもへば又奴やつ  
めがむつとつと何なにのともあは古金こきん達の昔むかしくらお尋たづ  
者ものもろふいまぞ引換ひきかふも出でば此こゝ蔵くらふ隠かくて居ゐるの

曲者あり此言 訣  
 ばくばりかん と答  
 へてさきまうがとあま  
 せ古金くくと擲か  
 せしハ口おしくも  
 誠非是非がるひア  
 ころも口がととびま  
 とサア元文殿「おつ  
 と合点そもく二代



蔵石部金太郎が  
 驕侈の盃觴はと  
 金箱せたるきーが  
 是ぐい娘子供ふ  
 解らぬ由へやつたり  
 いのゆの俗語ふいと  
 七年前質屋仲  
 間の寄合小親の



名代として柳橋やなぎばしの榎木樓えのきりやに登りて処手取ばし藝者げいしや  
のお志こころちとつゝ懐なつかを見まみままとといい志こころはは馴な染そ  
てかさねて終つひ男子おとこをうむ此子の名を小金次と  
つゝ是を両親ふたごころふかくさんさん為な我元文金五十兩の一  
包ひとを蔵くらより盗ぬすいいぐぐ或家へ賃入ちやいして通用金二百  
兩をかりそれをめつて彼兩人を賄もふとい誰も志  
らねば親父おやぢふむひて若且那わかふふよよささかか姫ひめがある  
と口々くちくちふ言い込こむ金吉きんきちささらら先ま妹いもうとを先へ縁えん付づんと  
ああららううぐぐへ口くちをうけけが兄あにとちがつて妹いもうとのちと顔

がふ下くだるるふ紅べに白しろ粉こなををふふててとぬりつけ。有ある  
まうせまうてて立た流ながるる衣き裳ぬいと着まけけが由よしへへそそままが為なるるいいとと  
女おんなが見みおおととささるるれれば娘むすめいいつつぬぬが着まけけ物ものををりり哉や  
くれくれるるああらら貫つらひひふふ杯さかと悪わる口くちいいふふ者ものををりりてて数かず度ど  
の見み合あひひも整ととのぬぬががささてて金かねといいふふののいい結むすのの神かみととああるる  
かかしてして其その妹いもうとふふ三さん百ひゃく兩りやうのの土とち産うぶがが付づといいふふつつららばば断と  
つつとと口くちぐぐううらら引ひををりりだだここあありりがが鎗やり栗くり屋や山やま助すけとと  
いいふふ者もののの見み世よ蔵くらと見みて娘むすめををききかかささてて金かね吉きちがが蔵くら  
ふふ惚おれふふんでんで姫ひめ入いのの落お札しるしふふつつとと見みれればば金かねがが姫ひめ

不貫ひくれろか供ともと娘むすめがたると見へる。そと引  
つぐひて金太郎の娘むすめ持丸屋もちまるやとつゝ者ものの娘むすめと金  
吉きんきちのめがひ一ツで言い込こば先までも智ちふふのかまは親  
と目當めあふ相談さうだんさまり間まもあく婚えん礼れいも整ととのひけ  
ば金太郎きんたろうを家督けたくとて金吉夫婦きんきち夫婦の古々ふるふるの伊勢  
へ隠居いんをさる「金吉夫婦の説  
後の引合ふ出されさて金太郎きんたろうの女房にようばのさよとが  
金作りきんづくりのめがねふたがりば髪かみも獨ひとりでも縫ぬい針はりと  
つゝふ及および家の福ふくの神かみさぬれども金太郎きんたろうの是  
を嫌きらひて彼かのおむちのこへ寝ねとまりとらる「こあは

家の道具たぐいと持もちぶて此女房このにようば見てとり逆さかも此男このおとこふ  
誠まことと尽つとも水みづの淡あはと先まとよく見みきこむをば里さとへ  
帰かへりて離縁りえん状じょうととりし幸さいひとありて此家このいへうら  
十倍じゅうじふの商人あきんどの家いへへ忽縁とつぜんづきしとぞつゝさて金太  
郎おさむらの福ふくの神かみさぬれとよろこび小金次こがねじと或ある  
魚屋いさなやへ預あづかけおむちと直ただふ家いへへ入いれと日ひう「おとこ  
おとこ遊あそ友とも達たち遊あそ  
藝げい人ひとが立たち入り入いれかろりりりり朝あさう「おとこ  
おとこ呑のや唄うた  
やで親おやの禁札ひんせきの竈かまどの焚たき付つきとみれば二代目にだいめの伊勢  
屋いせやハ初はつ鯉りの得意場とくいばとあつやどあまをばおれまて大金

と費せし己が稼の一朱ゆべきは皆やりくりのた  
 まれが其よりふとせ付ん為ふりか地面と家蔵を  
 書入て二十両かりてあちあちへ返せばその質う  
 戻つと皆さん方なりが二代蔵のお名残りありそと  
 いふもあつたのか志ちが此家の今が見限りどとと金太郎  
 とだましきうして蔵の古金をゆつて身構の別宅へ  
 連て行つりといくくく叫けり

此余談三代蔵不属す

二代蔵終

亭服部應賀新著作表題

當世利口娘 <small>二号</small>	虫類大議論上下	日本女教師
<small>正札</small> 智恵の秤 <small>三号</small>	權兵衛種時論	洋学古切雀
新製兎美断語	<small>同二号</small> 太郎兵衛水掛論	近世いざれ墓
天上大珍事	<small>同三号</small> 孫兵衛活計論	放言深山鳥
金庫三代記 <small>全三冊</small>	市の虎狩	みそとて全男
驕人びらり壺	ニヤアチウ談	和談三才圖笑 <small>全三冊</small>
東京花毛拔 <small>五冊</small>	畑水練	豊年五穀祭 <small>三</small>
青樓半仕通 <small>全三冊</small>	轉ぬ前の杖	大鉦託新文鬼談 <small>三</small>

小説社中發兌書林

小傳馬町三丁目	山寄屋清七
大傳馬町三丁目	丸屋正五郎
東神田須田町	高木和助
神田通新石町	紀伊國屋徳藏
人形町通新栗物町	上州屋重藏
京濱町三丁目五番地	星野松藏
東兩國元町五番地	鈴木勘二郎
大門通浪花町	鶴屋喜右衛門

服部應賀著

記

三代蔵

三代

記



三代蔵

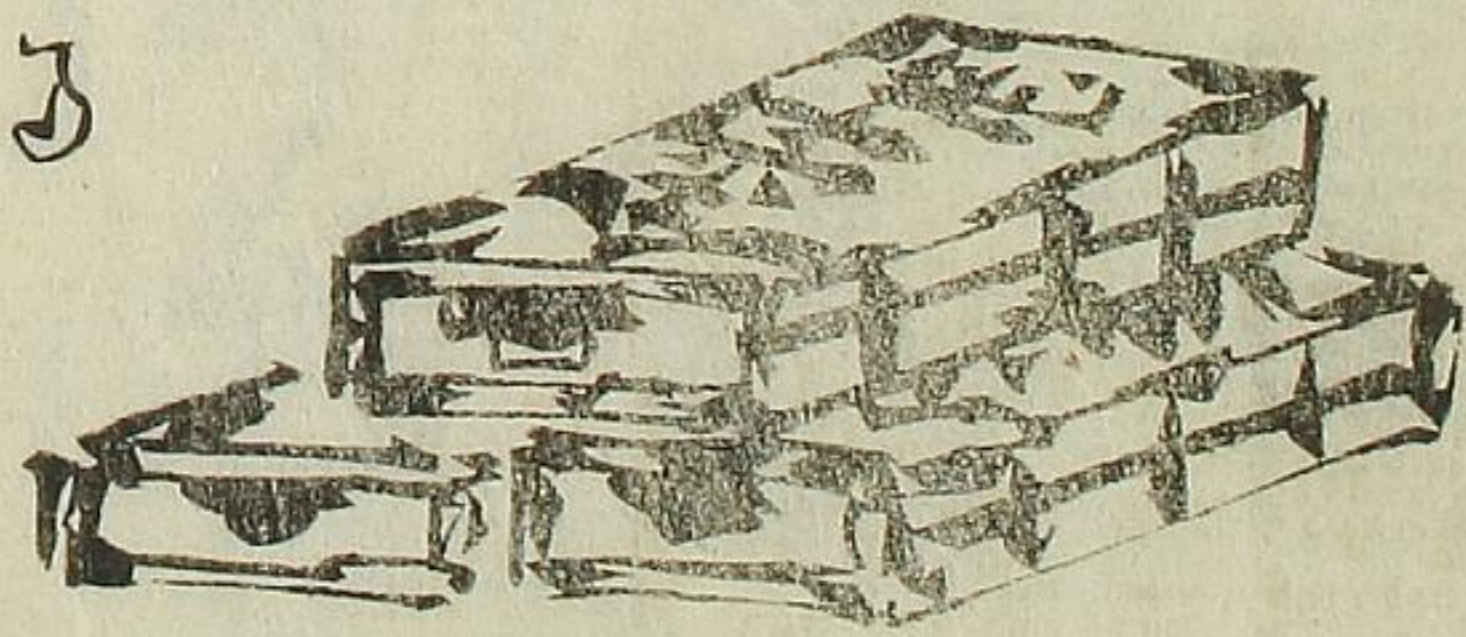
鬼

三代目の  
石部小金次

魚を養

道々家名を

身及する



質屋 三代目 石部小金次

金庫三代記

三代蔵

譬言

服部應賀著

夫福貴不生る者ハ福貴を知ば珍膳も毎日喰へばちんぜんと思ハぬ二代目の伊勢屋金太郎ハ己ガ身骨を勞せぬ金由へ其得難と云々ねバ湯水のサリ不費一時代我等ハ都の生れ色不そやき出らん形不あること我とこが身の上とらひて面白狸の腰ふくれ頭を押へる者ハ存けむと由天

道みちいづくいづくたをたを免めんすべき其戒いまいちの人ひとを以もつてるさしむ  
れば誰言たれいひ初はつつともかく石金いしがねの金蔵かねくらより三夜さんやはか  
けに金玉こぎよくが飛とぶせばもそや狐きつねの娘むすめ入い長ながもちのい  
朝風あさかぜの咄はな忽たちち髪結床かみむすぶとふつとりり其夕方ゆふかたの町内まちうち  
ふあらしぬ者ものもあく弘ひろりけむは是こゝまぐ石いしと金かねの  
堅かたひ家名いへなが金かねを呼よば無利足むりあしのうへへ盆ぼん極進物ごくしんぶつ  
とて金かねを預あづかり者ものもあり又安利やすりで預あづかりけり者ものも  
つり此者こゝろ等ら此咄はなを聞きが否いな石部いしべの店みせへ誥あけけ  
番頭ばんとうの忠告ちゅうこふせまりて御入用おんいりようの節せうの何時なんときあり

とも急度きふど返へん海うみ申まをとある此證書こゝろと引ひかへ預金あづかで  
返かへしくれと我われがち罵ののらむと忠告ちゅうこの惘むごるる金かね  
太郎たろうの朝寝あさねと一い間まへへちむきて皆帳面みなちやうめんふある預あづか  
り金かねの御返おんへん海うみふけむはあしぬといへが金太郎かねたろう欠か  
と志こゝろるる譬たとへ帳面ちやうめんふあればと我われ預あづかり金かねる  
ねが親父おやぢうと取とり見世みよう返かへすと勝手かて次第しだいふ  
志こゝろるるいと夜具やぐを冠かぶむ忠告ちゅうこ是こゝも又またつれ  
て夜具やぐを搔かのけ顔かほふ筋すぢせありいりる親御おやご  
う此御身こゝろ帯おびを讓受あづかてそん事こといふさば忽たち



此家藏を打たる  
 一、あゝの手口を  
 拵取う又御上へ  
 原告される時の連  
 由言開のござぬ負  
 公車あるがあち  
 の入費を六ちうで  
 出たの重荷のうへ  
 の小附のどりあり

とも道せつけん御  
 返渡の外にあす  
 う時らそ地面家蔵  
 由厭あくか仲間中  
 へありと質入を  
 されませ是もぐ度  
 く御異見もいた  
 たるもど右う左へ  
 抜る御方ふ百度

金を連て逃る



「金があんまりたまのてい  
 老うがあらう後ふ  
 やりいりんがががが  
 老このある金の後  
 ちらのていへきま  
 ハチ大まのこもん

金が溜る



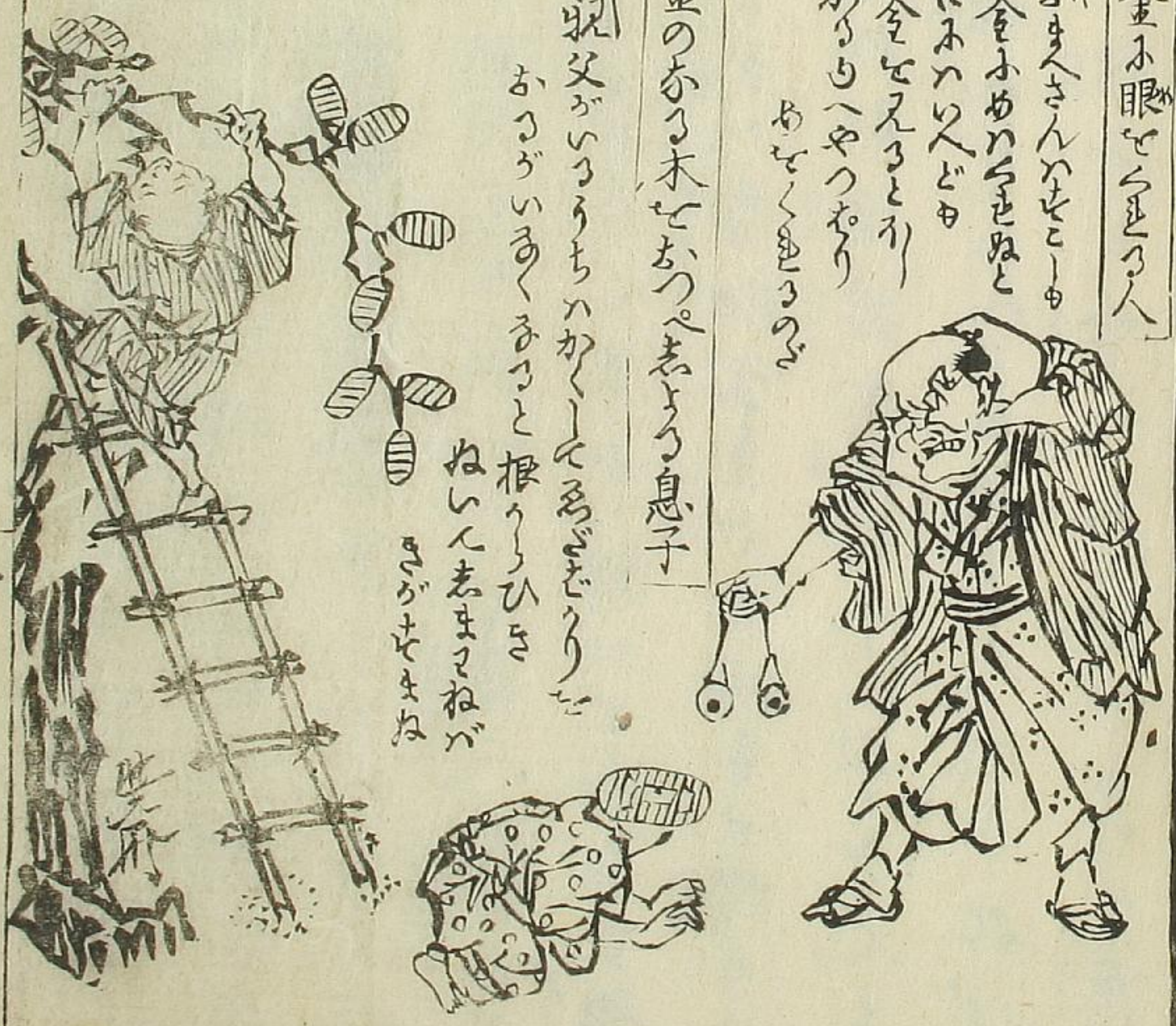
昔とちがのてい今ハ  
 せさのさびしくその  
 ありがややうびんが  
 あるうらたまに本げ  
 てもやくふれたねと  
 おり人どやのちりあげ  
 さ小まる小ハ  
 こまる

金小眼でらる人

おまさんいせこ  
 金小めりせぬと  
 はあの人ども  
 金でえるとか  
 がらうへやつわり  
 あせくさる

金のある木をわつて老よる息子

親父がいううちハかくして老よる息子  
 おつがいうちと根うらひさ  
 ねいん老まらねが  
 さがたまね

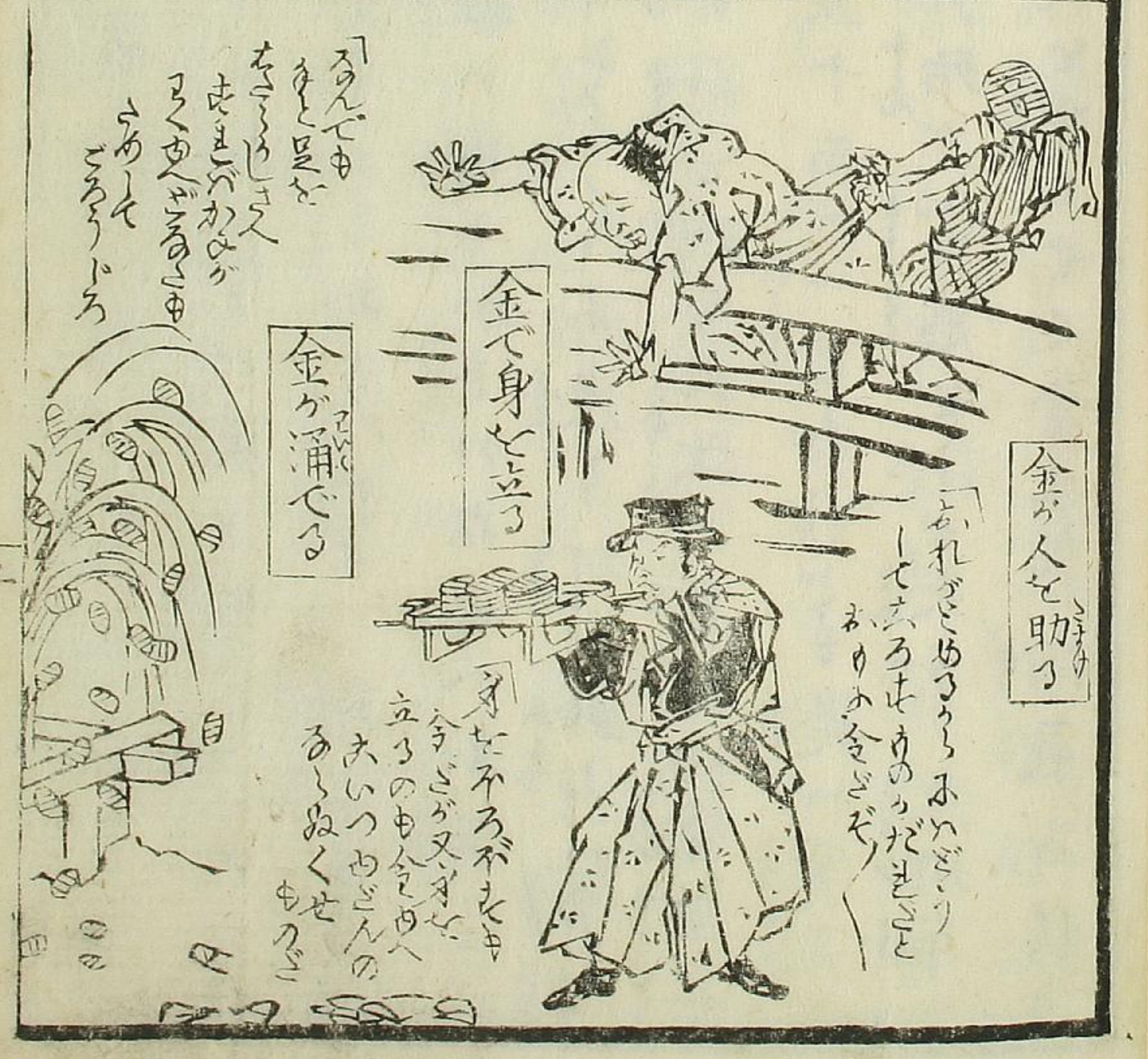
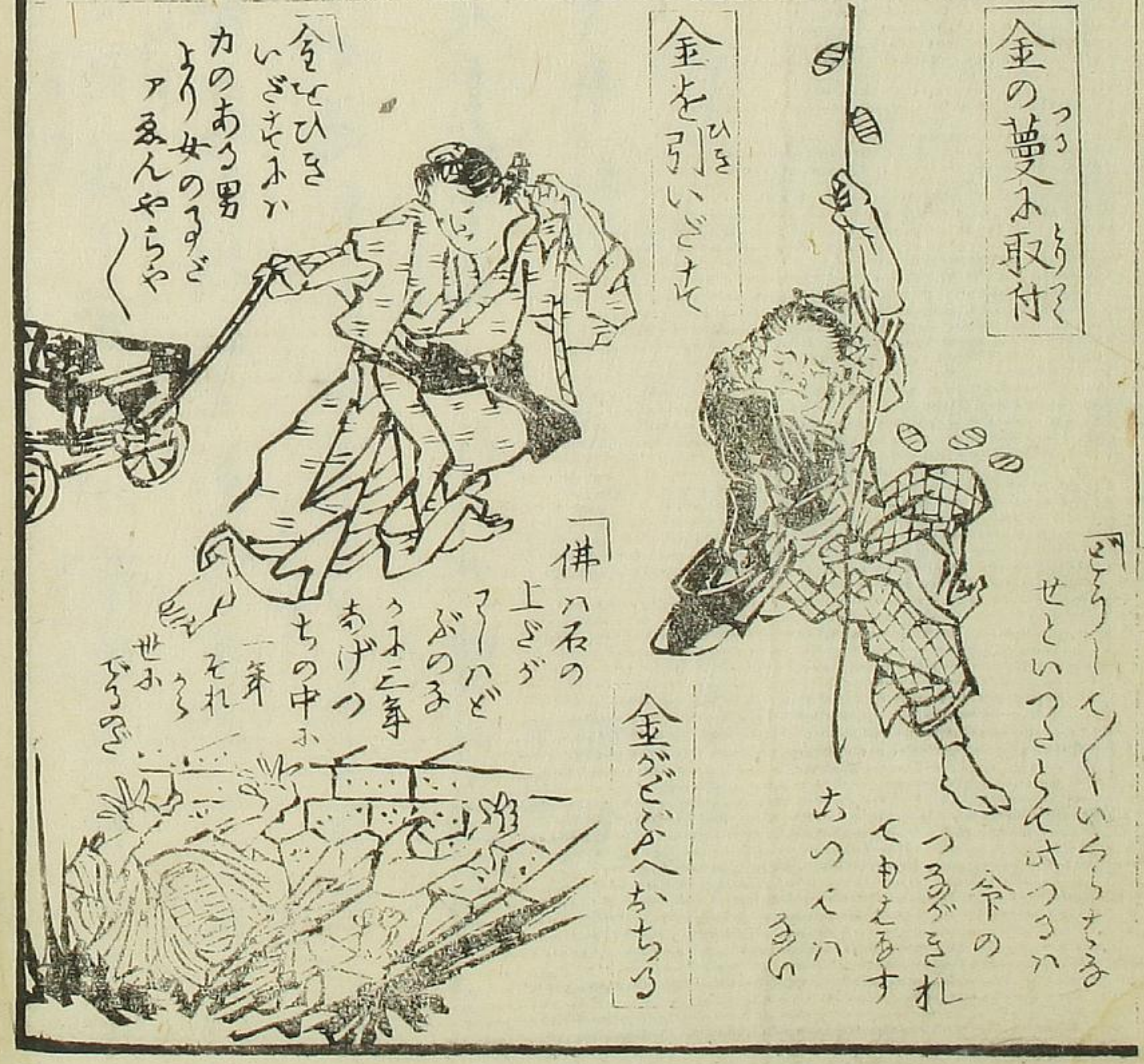


ても同一事おれども親御様の三度の食事ばり  
りの稼ひでらさる奉公人由へ味佳物をお喰せる  
されておひより粗食物を召あがり一がらあとの  
御代ふるのての夫がひつくりかへりて商人の檢約が  
才一とて惣菜もあらとまりて年中朝はとうふの糠  
味噌汁昼の数の子夕の香物あるともあらと獨りの  
朝飯くく肴づくめのお酒盛が夜の十二字まぐも  
毎晩づく主の家来のといんども同ド人間おれば  
あらと喰ぬ物の誰ふも喰れぬが根とるのて悪

助めの大金を盗で欠落し其外の若者も皆暇哉  
とり子蔵たちの今度のおかしくさんかきてく天窓  
小瘤が絶ぬといつて是も病氣を言立ふるも選だ  
して私ひとり三人まんと勤る処へ大勢の洪浪が  
押よきと堤防が手おくれあると家蔵とと  
らまきと流行言葉で御異見いさせを発明奮  
發をふるまませませ。まぐ預り金返海ハ三日の日延  
といさくかくと苦くく見世へ行ハ金太郎寝  
耳へ水と浴せらとて夜具を引かぶり志を

いふと見へーが枕  
元の硯をひきよせ  
て何う認終るがい  
かや眺まどひてその  
まゝ見へば忠吉も  
漸く三日の日延を  
とくのへて一間へま  
見れば金太郎はか  
らげ其坐不忠吉

殿金太郎と認る  
一封あまは是を閉  
き見れば地面家  
蔵由某へ二千兩の  
書入ふありとるを志  
す一我ハ申さけか  
きまゝ身と隠さる  
へハ跡のところハ汝  
の了簡ふまゝせよ



しくたのむとの書置かれは是も驚きいそぎおむ  
ちせよびて志うぐとかさせば更も驚くいろゆ  
くおん事もあるううとおひ人バとく別宅まを  
女房でかけまが私い少もかまぬゆへお前よ  
かりあるさまよとそとくお戻り行は此上の音引  
受んと金蔵の金箱を残り改め見れば皆空箱  
ふて中お元文金五十兩の一包あれども是は實用の  
金あるぬを志れが殆ど當惑せしが夫より魚川岸お  
預おき—小金次を呼よせし金太郎病氣おはる

将小金次家督の披露せり—諸々の借財預  
り金の仕方を附るお一年余りかたきども  
何をいふお大度な覆るお及て空手の一  
人二人支るカおまけまが諸方の熟談も  
のいざるゆへ是非なく地面家蔵の其引當お  
むけ諸道具を以て残らば其海方お充忠吉  
小金次の余金おかけまが余儀おく東京の  
場末の裏家をかりて茲おおひて小金次に  
まぶらの元手を以て仕習ひたる業ゆへ魚

賣うとさせけり。小こ金かね次つぎの放はな埒らちの父ちち母ははの血ち統ちゆう  
ふよろねば賤せんき高たか賣うの重おも頭かみふり漆しぬ天あま稟らん  
あつる者ものもへ何なに卒そつ一度いちど家いへ蔵くらの主ぬしとふつて親おや  
の家うち名なを顯あさんと憤い発はつの一心いっしんより朝あさも疾はに  
起おこて川かわ岸あしへ行ゆ足あしをちうらふふんを尽つくしける  
由よしへ其その日ひの糧かふり足ありけむば忠ちゆう吉きち由よし安あん心しんのよる  
ゆつて炭すすの志しれと不ふふりるむば力ちからを助たする為ため  
其その身みも日ひ雇いふ出でけつさん小こ金かね次つぎの丸まるの垢あか地ぢ  
ゆつて富士ふじの山やまを造つくる如ごとく望のぞむ昼ひる夜よふた由よしも

稼かせぎけつうち或ある日ひ古ふる脊せの大おほ鯉いを買かひ常じょう小こ具ぐ  
負おの得と意いへ持も行ゆじゆ其その日ひも限かぎつて其その鯉いを何なに  
方かたもへ買かねばまもあく臭くさまが舟ふねけつゆへも  
てにまゝて家いへも持もかへ札しるしば末すえ忠ちゆう吉きちの戻もどらぬ  
ゆへ其その松まつ魚いしを地ちも投ないじゆて獨ひとり言ことふ。ふさけ  
あ一口ひとくち惜おしし斯し丹たん誠まことを尽つくすいへども聊いささの余よ銭せん  
ゆ残のこらば珠たまふりも始はじめて元もと直ちか高たかる鯉いを買かひ  
又またりも限かぎつて是こゝを賣う残のこせが翌あした日ひの元もと手ても  
更さらふも六むれ全ぜんく吾われもさづらる毒どく魚ぎよもるむば

迎<sup>むか</sup>ひ開<sup>ひら</sup>けぬ運<sup>うん</sup>と定<sup>さだ</sup>めて此<sup>こゝ</sup>腐<sup>くさ</sup>魚<sup>いし</sup>を食<sup>く</sup>はて  
 死<sup>し</sup>ぬがまゝと日<sup>や</sup>本<sup>ま</sup>魂<sup>たま</sup>をたてこゝも乱<sup>みだ</sup>さば一心<sup>いっしん</sup>覚<sup>さ</sup>  
 悟<sup>と</sup>ふ鏝<sup>えん</sup>を引<sup>ひ</sup>きさげ出<sup>で</sup>て又<sup>また</sup>ふて頭<sup>あたま</sup>を切<sup>き</sup>落<sup>お</sup>せば腹<sup>はら</sup>  
 より打<sup>う</sup>ち紐<sup>ひも</sup>のたをうを見てその紐<sup>ひも</sup>を引<sup>ひ</sup>きよばふ  
 しぎと財<sup>さい</sup>布<sup>ふ</sup>の出<sup>い</sup>けうの<sup>うち</sup>へ其中<sup>そのうち</sup>を見<sup>み</sup>て色<sup>いろ</sup>が一封<sup>いっとう</sup>の  
 上<sup>う</sup>書<sup>か</sup>ふ石<sup>いし</sup>部<sup>ぶ</sup>金<sup>かね</sup>吉<sup>きち</sup>の名<sup>な</sup>前<sup>まへ</sup>あり其<sup>その</sup>封<sup>ふう</sup>を切<sup>き</sup>は八百  
 圓<sup>えん</sup>の金<sup>かね</sup>札<sup>さ</sup>あり小<sup>せう</sup>金<sup>かね</sup>次<sup>じ</sup>夢<sup>ゆめ</sup>の如<sup>ごと</sup>くふ驚<sup>おどろ</sup>き唯<sup>ただ</sup>忙<sup>いそ</sup>  
 然<sup>ぜん</sup>たう処<sup>ところ</sup>へ忠<sup>ちゆう</sup>吉<sup>きち</sup>戻<sup>もど</sup>りきて希<sup>まれ</sup>有<sup>あり</sup>の<sup>うち</sup>りさまを  
 同<sup>どう</sup>が由<sup>よし</sup>へ日<sup>ひ</sup>頃<sup>ころ</sup>の心<sup>こゝろ</sup>中<sup>ちゆう</sup>よりうみの始<sup>はじめ</sup>末<sup>すえ</sup>を語<sup>かた</sup>れば忠<sup>ちゆう</sup>

吉<sup>きち</sup>敬<sup>けい</sup>馬<sup>ば</sup>き其<sup>その</sup>財<sup>さい</sup>布<sup>ふ</sup>を見<sup>み</sup>て是<sup>こゝ</sup>ハ西<sup>せい</sup>國<sup>こく</sup>より御<sup>ご</sup>家<sup>け</sup>へ  
 奉<sup>ほう</sup>公<sup>こう</sup>ふきささう悪<sup>あく</sup>助<sup>すけ</sup>といふ者<sup>もの</sup>の品<sup>しな</sup>あり此<sup>こゝ</sup>者<sup>もの</sup>大金<sup>たいかね</sup>  
 を盗<sup>ぬす</sup>うて出<sup>い</sup>奔<sup>ほん</sup>せし由<sup>よし</sup>へ諸<sup>しよ</sup>方<sup>はう</sup>をせんさくをたれ  
 どもその<sup>その</sup>うりうりて忍<sup>しの</sup>びざりし<sup>し</sup>がさてハ此<sup>こゝ</sup>者<sup>もの</sup>本<sup>ほん</sup>國<sup>こく</sup>へ  
 立<sup>た</sup>戻<sup>もど</sup>らんとして海<sup>うみ</sup>船<sup>ふね</sup>ふ乗<sup>のり</sup>しが天<sup>てん</sup>罰<sup>ばつ</sup>のがれがと  
 く終<sup>すま</sup>ふ海<sup>うみ</sup>中<sup>ちゆう</sup>ふ溺<sup>ひやく</sup>死<sup>し</sup>せしを此<sup>こゝ</sup>魚<sup>うい</sup>の是<sup>こゝ</sup>れを喰<sup>く</sup>ふ  
 とし<sup>し</sup>ども此<sup>こゝ</sup>東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>ふきささうりて數<sup>かず</sup>多<sup>た</sup>の高<sup>たか</sup>人<sup>ひと</sup>の手  
 へ由<sup>よし</sup>渡<sup>わた</sup>らば又<sup>また</sup>お得<sup>とく</sup>意<sup>い</sup>由<sup>よし</sup>是<sup>こゝ</sup>ふ限<sup>かぎ</sup>つて求<sup>もと</sup>まざるハ  
 全<sup>まこと</sup>く天<sup>てん</sup>より御<sup>ご</sup>身<sup>み</sup>へ授<sup>たま</sup>はるありかろ珍<sup>めづ</sup>事<sup>こと</sup>

私こゝろみあるべしと直ただと兩人御役所へ出いてく言こと  
 上かみしけきハ金札御戻かへりの上に小金次への孝心こゝろの  
 御褒美忠吉ごほうび ちゆきちへの忠義ちゆぎの御褒美あるが由よしへ殊とと  
 小よろ大びん程ほどなく其金をもつて元もとの家蔵いへくら  
 立たちゆどり三代の家名を顯あはしめて日ひづげの父ちちを  
 養やしなひしを代よみ稀まれある孝子ふぞけりける

二代蔵大尾

明治七年六月

驕人必慄まじやう ひと かならず びん うれし筐かま

一冊讀切

服部應賀著  
猩々曉齋画

小学必讀 童子問答しょうがく かならず 読む とうし もんたう

萩原し彦著  
吉田庸徳校

金庫三代記かねくら さんだい き

全三冊讀切

豚部應賀著  
猩々曉齋画

東京書林

濱町三丁目  
九番地

星野松蔵

